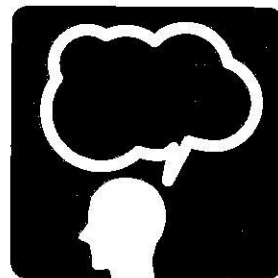


経営(継業)のツボ



転期に立つ経営者の資質の鍛え方⁸⁵

作用機序

早川浩士

有限会社ハヤカワプランニング代表取締役

はやかわ・ひろし

経営コンサルタント。1991年に独立。介護事業に関する独自の調査に基づいたデータ分析を各誌・紙に発表。著書に『早川浩士の常在学場』(筒井書房)、『介護人財創造塾』(筒井書房)、『介護保険改正に勝つ! 経営』(年友企画)、『データで徹底分析 介護事業の最新動向と経営展望』(日本医療企画)など。

http://www.hayakawa-planning.com
ブログ: http://ameblo.jp/hayakawa-planning/

作用の仕組みを知る

作用機序とは、薬物が生体に何らかの効果を及ぼす仕組みや、メカニズムといったことを意味する薬理学の用語である。たとえば、

アルツハイマー型認知症に用いられるアリセプトの作用機序については、次のように記されている。

「アルツハイマー型認知症では、脳内コリン作動性神経系の顕著な障害が認められています。ドネペジル塩酸塩(アリセプト)は、アセチルコリン(ACh)の加水分解酵素であるアセチルコリンエステラーゼ(AChE)を可逆的に阻害することにより、AChの分解を抑制し、作用部位(脳内)でのACh濃度を高め、コリン作動性神経の神経伝達を促進します」*1

要約すると、アルツハイマー型認知症の症状は、脳内の伝達物質であるアセチルコリンが少なくなることで発症するため、これを分解するアセチルコリンエステラーゼを阻害するためにアリセプトを用いる。アリセプトがアセチルコリンエステラーゼに作用することを、作用機序というのである。

このような薬剤の作用の仕組み

を知ること、認知症の治療に役立てられているのだ。こうした発想は、人財育成にも応用すべきである。

干し柿づくりの「作用機序」

主催塾ではここ数年、「干し柿づくり研修」に取り組んでいる。研修の順序と、各ステージでのポイントはこの4点になる。

①干し柿用の柿を集める

これを実践するには、いつ、どこへ、誰が、どのようにして柿を集められるかをきちんと把握することが求められる。

②柿の皮むきを行う

集めた柿の皮むきは自分たちで行う。これには、どこで、誰がむくのか、利用者や地域をどのように巻き込むか工夫が必要になる。

③吊るして干し柿にする

吊るし方や縄の結び方、むいた皮の再利用方法などについては、可能な限り利用者から教わるようにする。

④干し柿は、多くの人に振る舞う

仕上がった干し柿は、茶話会などを開催して近隣の住民に振る舞うなど、干し柿づくりが地域交流の潤滑油となるようにする。

この研修では、利用者(特に認知症の方)が培った知識や技術を再び活かすことも期待できる。「市田柿」の産地である、南信州の塾生が「市田柿のうた*2」を紹介してくれた。

一 私はこころ柿市田の生まれ

信州伊那谷 天童育ち

色気ついたらむしられ取られ皮をむかれて丸々裸

二 糸に吊るされ干されて二十日

やせる思いのこの身の辛さやがて下ろされモミモミされて売られて行く身に薄ら化粧

三 箱に詰められ車に揺られ

西や東の市場で売られ知らぬお方に口づけされて消えるこの身は恥ずかしうれし

どうだろう。干し柿づくりは地域のあるべき姿への「作用機序」になるのではなからうか。オレンジプランならぬカキプラン(干し柿づくり研修・チャレンジプロジェクト)である。

今後の事業と地域のあり方を腐心されるトップがいたなら、干し柿づくりの「作用機序」を試してみたい。

*1: アルツハイマー型認知症を支えるアリセプト(<http://www.aricept.jp/index2.html>)から引用 *2: 「芸者ワルツ」を、この歌詞で替え歌として歌う